

心の輪を広げる体験作文

【小学生区分】優秀作品

千葉市立蘇我小学校 五年

「心にともったともじび」

天辰 公紀

鉛色の空が広がる十二月、僕は駅近くの会場で行われるイベントに行くために自転車を走らせていた。駅のロータリーで小さな箱を胸に抱えた十人程の人が「募金をお願いします」と呼びかける声が聞こえてきた。休日の駅は人気がなく、空模様と重なり寂しさを感じた。僕はわなげのゲーム、わたがしや焼き鳥を買うのを楽しみにおこづかいを持っていた。募金活動をしている人の横を通り過ぎる時何か後ろめたい気持ちがあった。

でも家では赤十字に寄付をしたり、小学校でも赤い羽根募金に参加したりしており、僕はそのまま横を通り過ぎた。

その時、おじいさんの大きな声、聞き慣れない抑揚の少しまごまごした感じの「募金をお願いします」と言う声が聞こえ僕ははっとした。耳の聞こえない人だと分かった。

人任せにせず、自分ができることは一緒に同じようにしたいという、おじいさんの気持ちが伝わってきた。僕は自転車を下り、おじいさんの募金箱にお金を入れた。「おじいさん頑張ってください、風邪をひかないでね」と伝えたかったけど、耳が聞こえないからどうしたらいいかなあと考え、思い切って手を差し出し握手をしてもらった。おじいさんは「有難う」を言葉と手話で返してくれた。僕は嬉しくなった。心も何だか温かくなった。

おこづかいが減ったから買いたい物を何か我慢しなくてはならない。その時思い出すことが心に浮かんた。僕の通っていた幼稚園では月に一度、お弁当の時小さな塩おむすび一個だけを食べ、おかず代を困っている人や海外に学校を建てる活動に寄付をしていた。その日は家に帰ってもおやつも食べず、お腹をすかせ、困っている人の気持ちを考えた。いつの間にか困っている人に寄り添うことができなくなった自分に気が耻ずかしくなった。

僕の小さな我慢、わずかなお金だが、少しでも耳が不自由な方の役に立てていただけたら、僕が自分のために使うより活きたお金になると思った。

僕は教科書で点字を習ったり、総合学習で手話のあいさつを学んだりしました。もっと勉強しておじいさんに気持ちを伝えられたら良いなあと僕は考えた。僕の心に再び思いやりのともじびがともった。